

障がい者とのスポーツ交流が高校生の障がい者理解や アダプテッド・スポーツの考え方に及ぼす影響

柴田 拓実（体育科教育学）

指導教員：宮崎 明世、長谷川 悦示

キーワード：特別支援学校、交流会、スポーツの工夫

【目的】

本研究では、高校生を対象に、障がい者とのスポーツ交流を通して、障がい者や障がい者のスポーツ活動に対するイメージ、誰もが楽しめるスポーツの工夫についての考え方がどのように変わるのかを明らかにすることを目的とした。

【方法】

T 高校と 0 特別支援学校の交流会に参加した T 高校の生徒 14 名、S 高校と 0 特別支援学校の交流会に参加した S 高校の生徒 30 名を対象とした。また、T 高校の 1 年生 231 名と 2 年生 225 名を対照群とした。T 高校の交流会では「ダンス」が、S 高校の交流会ではバレーボールを改変した「ワンボール」とサッカーを改変した「ラインサッカー」がスポーツ交流として行われた。交流会終了後に、障がい者やスポーツ活動に関する質問紙調査に回答させた。質問項目は 4 件法と自由記述のもので構成した。対照群についてはホームルーム等の時間に質問紙調査を行った。

4 件法については「1. 当てはまる」を 4 点、「2. やや当てはまる」を 3 点、「3. あまり当てはまらない」を 2 点、「4. まったく当てはまらない」を 1 点と換算して、一要因分散分析を行った。自由記述については記述内容のキーワードでカテゴリー別に分け、必要に応じてサブカテゴリーの分類を行った。

【結果と考察】

対照群のうち、これまでに障がい者との交流経験があった生徒は 243 名、交流経験がなかった生徒は 213 名であった。それぞれを対照群（経験あり）、対照群（経験なし）として、交流会参加群との 3 つのグループにおいて比較し、違いを検討した。

障がい者に関するイメージ（8 項目）について比較したところ、交流会参加群と対照群（経験あり）では 5 項目、交流会参加群と対照群（経験なし）では 6 項目で交流会参加群のほうが肯定的なイメージを抱いていた。また、対照群（経験あり）と対照群（経験なし）では 4 項目で対照群（経験あり）のほうが肯定的なイメージを抱いていた。障がい者のスポーツ活動に関するイメージ（8 項目）において、

交流会参加群と対照群（経験あり）では 2 項目、交流会参加群と対照群（経験なし）では 5 項目で交流会参加群のほうが肯定的なイメージを抱いていた。また、対照群（経験あり）と対照群（経験なし）では 2 項目で対照群（経験あり）のほうが肯定的なイメージを抱いていた。

このことから、障がい者とのスポーツ交流の経験によって、障がい者や障がい者のスポーツ活動について肯定的な考えをもつことができたと考えられる。

障がい者がスポーツを楽しむための工夫として、どの群においても「ルール」、「用具」、「コート」の工夫についての記述がみられた。交流会参加群は「ルール」についての記述が 75.0%であり、対照群の 49.0%（経験あり群）、40.8%（経験なし群）と比べて高かった。また、技能レベルが異なる人が一緒にスポーツ活動を楽しむための工夫においては、2 つの対照群では「ハンディキャップ」をつけることが最も多くあげられたが、交流会参加群ではサポートなどの「協同」に関するものが最も多くあげられた。

このように障がい者とのスポーツ交流をすることで、同じ条件の中で技能レベルが異なる人が一緒にスポーツを楽しむことができるということを学ぶことができていたといえる。

交流会の感想では、交流会を通して障がい者の見方や交流の仕方に関する考えが変わったというものが多かった。また、交流会の中で積極的にコミュニケーションがとれたという感想とともに、それがあまり思い通りにいかなかったということもみられた。

【結論】

障がい者とのスポーツ交流を行うことによって、障がい者、障がい者スポーツに関するイメージは肯定的に変化し、交流会で行ったスポーツの工夫の経験を自らのスポーツ活動に応用して考えることができるということが明らかになった。また、障がい者と積極的にかかわる姿勢や必要な配慮など、「共生」に必要な能力を身に付けることもできるということが明らかになった。